

コピーライティング基礎

- プログラム概要** : コピーライティングによる産業振興・地域振興への貢献
実習先 : 新潟県燕市
 公益社団法人つばめいと様との連携で、つばめ産業協創スクエア
 (新潟県燕市宮町5-8)を拠点に活動
参加人数 : 14名
学部学科 : 日本語コミュニケーション学科、日本文学文化学科、環境システム学科、
 データサイエンス学科、経済学科、経営学科、政治学科、人間科学科、
 数理工学科
実習期間 : 令和5年2月1日～2月10日
本学担当教員 : 梅田大輔(教養教育リサーチセンター 客員講師)

冬の新潟・燕で取材・ライティング合宿を実施

コピーライティング力・伝える力の「もと」となる取材力・聴く力・情報収集力のトレーニングのため、そしてリアルな社会の課題に貢献をすることを目指して、新潟県・燕市での合宿を行った。学部学科を超えた14名で、地場産業、商店街活性化、地域振興の現場の方々を取材し、それをもとにさまざまな言語化の活動を行った。

[今回の制作物]

- ・燕の方々14人のインタビュー原稿
- ・産業・地域振興スローガン・ステートメント開発・燕シビックプライドステートメント開発
- ・燕を舞台にした恋愛小説と詩の執筆・愛を温められる場所発掘

多くのインプット・アウトプットに取り組んだ10日間(土浦由貴 経営学科2年)

[1日目]燕市産業史料館にて燕市の産業である金属加工の情報を得た。カトラリーだけではなくキセル、やかんなど、展示資料を見ながら歴史や背景、燕の人たちのものづくりに対する貪欲さと柔軟さを学んだ。その後、つばめいと 若林さまのお話から現状と課題を知った。これらを衰えさせないために私たちにできることは何だろう。

[2日目]産業振興チーム(地場産業を担う若手後継者を取材)、商店街活性化図書館「ぶくぶく」チーム(ユニークな民間図書館関係者を取材)、地域振興チーム(新しくなった道の駅国上の関係者を取材)の3チームに分かれて取材活動を開始。緊張しながらも取材対象者から仕事や燕へのアツイ思いをお聞きできた。反省点は魅力を引き出せるように事前にもっと調べるべきだったこと。

[3日目]引き続きチームで分かれて取材。前日の反省を活かして取材を改善できた。■ぶくぶくチーム:反省を活かしてインタビューの方向性を定め直して臨んだ。■道の駅チーム:スタッフの人々に慣れてきて気を落ち着けて取材できるようになり、人柄も見えてきた。長い年数勤めている方、広報の方にお話を伺い、燕にとって道の駅の重要性を感じた。■産業振興チーム:工場見学を通じてインタビュー内容の理解が深まった。取材を終えて産業の問題点も徐々に見えてきた。

[4・5日目]2班に分かれ、7人は「道の駅国上」にて、「天神講」の飾りづくりワークショップのお手伝い、鬼の着ぐるみを着て節分イベントのお手伝いを行った。弥彦神社、弥彦駅周辺(おもてなし広場)散策を行った。もう7人は前日までのインタビュー音声の文字起こしを進めた。

[6日目]インタビュー音声の文字起こしを進めた。文字起こしをすることで、取材内容のより深い理解に繋がった。知りたい部分がたくさんできて、もう一度インタビューしたいと思った。もっとゆっくりははっきり話すべきだったと反省した。文字起こしの分担の仕方についてより良い方法を検討。

[7日目]スローガン30案作成、インタビュー原稿作成、恋愛小説執筆を開始。
スローガンは最初の10案ほどはスムーズにいけたが徐々に似通ってきて30案は辛く、質より量を優先してしまった。インタビューを通してそれぞれが大事にしたいと感じたことや、取材背景とのズレが出ないように対話を重ねて決めていった。同じ取材から出したスローガンがチーム内で四者四様になっていることが面白い。原稿はたくさんの情報から書く内容を絞るのが大変で取材対象者の個性を出すのが難しく、個性と説明文の中間を探りながら文にするのがさらに難しかった。



[8日目] 7日目の成果物をブラッシュアップ、恋愛小説と詩の執筆を進行。スローガン30案2回目はしんどかったが確実にいい案がでた。スローガンステートメントにならなくても要素として拾えるものが多く出てきた。インタビュー原稿制作は、当初、問題点についてのレポートのようになってしまったが先生のアドバイスから人柄、感情に焦点を置いてブラッシュアップした。

[9日目] 午前10時～午後12時、河川敷公園にて雪合戦を実施。オリンピック正式種目を目指している「スポーツ雪合戦」のルールを参考に久々に体を動かす。みんなが本気で勝つことを目指していて、7コピの何事にも手を緩めない姿勢を感じた。午後からは課題6つを全て完成。インタビュー原稿やチーム課題は全員完成させたが、その後の恋愛小説と詩に難航した。ストーリーの内容が定まらなかつたり、小説の入りを決めるまで時間がかかったりして翌日の朝までやっているメンバーや10日目の発表ギリギリまで粘っているメンバーもいた。小説や詩は初めて挑戦する人がほとんどで、コピーライティングとは別の難しさがあったが、散歩で見た風景や行ったお店でアイデアや刺激をうけて、より燕を自分の視点で感じたり自分ごととして捉えることができ、楽しく作ることができた。

[10日目(最終日)] インタビューを受けてくださった方々の前で制作物の発表会。完成しつつも本当にこれで良いのかという葛藤と緊張感が発表寸前まであった。しかし発表すると意外と良い評価をいただくことができ、安心感とともに感動が込み上げてきた。10日間が短かったのか長かったのかわからないがずっと詰めてやっていた分、大きな達成感、満足感があった。準備に時間をかけたからこそ、発表の時は余裕や自信を持ってできた。

[生活面についての振り返り] 夜遅くまでの作業、煮詰まる日々が続いたが、息抜きで燕を楽しむことができた。街を散歩しながら景色や雪を楽しんだり、喫茶店や銭湯に行って地元の人と会話したりして、街の生活に少しは馴染めたのではないかな。夜ご飯は初日に10日間の献立を決めて、逆算しながら買い出しにくなど工夫して自炊をした。14人での共同生活だったが主体的に行動する人が多く、素早く物事が進んでいた。タコライスやポトフ、ハンバーグなどご飯は毎日美味しく出来上がり、準備や後片付け、掃除なども協力して行った。製作の面では、上手く書けず辛いことも多かったがダイニングルームに行くとき必ず誰かが作業しているので一緒に楽しく進められた。笑いの絶えない充実した10日間だった。

○身についた力

インタビューは1時間ほどであったがどんなことを聞けばこの人を表現できるのかを考えながら取材できるようになった。活動は料理を全くしたことがなく、今回の合宿で少しできるようになって帰ることができた。(斎藤奨・数理工学科2年) / 話し合う力、自分の意見を言うようになっていった(大矢朱夏・経済学科2年) / 人間の魅力を引き出すようなインタビュー力が向上。人によって解釈が違うことを知ることができた(布施凌太郎・日本文学文化学科2年) / 人の良いところを見つめる力(生活も活動も)。生活面: 14人で10日間生活するうえで悪いところよりも良いところを探すことで楽に暮らせる。自分のいい面を人の助けに、自分の苦手な得意な人に助けてもらいたい関係性を築けた。活動面: 互いの得意、苦手な生活の中で見つけ、グループワークで試す、取材の深堀に活きた。バックグラウンドを知る大切さ。とりえず口に出す力、出してから助けてもらう(土屋好・経営学科2年) / インタビュー中に相手の表情がほぐれてきたことから、相手の魅力を引き出す聞き方や話し方が自分は得意ということがわかった。言葉への関心が身に付いた(安藤美彩希・人間科学科2年) / いろんなことを試す、苦手だったことがやってる内に、意外と難しくないと気付いた。まずは試す力が身に付いた(王奕維・データサイエンス学科2年) / 価値観の違い、自分が相手の価値観に寄り添った上で話を聞くことができるようになった。人によって話すことが得意な分野と苦手な分野を見極められるようになった。(柳沼観月・日本語コミュニケーション学科2年) / 向き合う力。良い意味でほったらかしてくれたから自分達で全部やらないといけない状況で、みんな、大丈夫? よりも何しようか? って周りみて1人1人が必要なことを考えて行動した。これはコピーライティングでも同じで、周り見つ必要なものを提示して、時間なくても絶対妥協しなかった。(大竹真維・経営学科2年) / 人の話を真剣に聞く。会話とか発言から熱量、エネルギーの変化を感じ取れることができた。嫌だなと思う部分が見えてしまうので集団生活は好きじゃなかったけど、意外といけた。気になるところも愛おしくなった。人間の苦みを味わえるようになった。(星野烈・日本文学文化学科2年) / 他人に助けを求められるようになった。わからないことはちゃんとわからないと言えるようになった(土浦由貴・経営学科2年)

14人での燕での文字起こしの合計は26万字に達し、インタビューや小説を合わせるとみんなですべて約30万字は書いていました。7コピの14人、梅田先生本当におつかれさまでした。そしてつばめいとの皆様、インタビューに協力してくださった皆様、燕の皆様、ありがとうございました。感謝申し上げます。(土浦)



スローガン・ステートメント(3領域) インタビュー原稿(14人)

「今日も明日も、ぶくぶく日和なんだ。」

ここは、昔がなくて良い図書館。
何をしていい、おしゃべりして、お菓子を食べながら、
何に話っただけいい、お話をしたって、イイリアルを味わったって。

ほじもして、ぼくの価値、ぶくぶく！
まだが新書だけだ、ここに「い」が読めなかったと語っていることを知っているよ。
ぼくは、我々からもらいものでここで買ったんだ。
なんでもかき出しの瞬間に、種を撒いて、何日か待たせて、
写真を取らせて、今がぼくが生まれたんだ。

本棚を「自分たち」「読者」と呼ばれる人たちが、ぼくを育ててくれる。
オーナーさんたちは、それぞれ自分の好きな本をばかばかに買っているんだ。
まあオーナーさんたちが、これから知り合うかもしれない人にも、おしゃべりや学生だって、
ぼくの世話を焼いてくれる、人との繋がりが。人との繋がりが。人との繋がりが。
そして何より、みんなそれぞれの「好き」がある。
嬉しいとか、面白いとか、誰かに共有したい思いは誰にでもきっとあるんだ。
オーナーさんたちは、その思いを届けてくれる。
何かがきっかけにならなくて、水を置いていくんだ。

オーナーさん一人ひとりの好きが勝手に伝わって、
誰か新しい本棚が学生たちとき、ぼくはとっても嬉しいから。
だって、ぼくがいないと、なかつたおもしろいかもしれないから。
仕事をしている人も、子育てをしている人も、おしゃべりや学生だって、
大層の中で、ぼんやりとぼくが話しているっていいよ。
たまには、多分おもしろい話を話してみたいかな？
ぼくってどうかな？

いつかオーナーさんも変わっちゃうよ。誰か来る人も変わっちゃうよ。
でも、この本棚は変わらない、ぼくは、ぶくぶくで思い続けるんだ。ずっと、ずっと。

ぶくぶくの本棚が、一つひとつの思い出の物語。
あまも、ぼくに話してみたい？

12

一生に寄り添う製品に感動を。

知らないことだらけで踏み出した。
後継者として決意。

食を繋げる私たち。私たちが一生に寄り添う産業。
スプーンやフォーク、ざるやせん。

何気なく使われている「もの」に込めた思い。
お客様の声を一軒一軒丁寧に読み、
世帯を継いでいく。

一生に寄り添う製品に感動を。
作りや技術、長く、長く。
次の世代へ受け継いで、
試行錯誤の日々。

原料から完成まで送りたい、金銭的に賄われる必要がある。
新たな工場を作る。

職人技を次世代に繋ぎたい。若手を増やす必要がある。
20年ぶりに新卒採用を始める。

時代の変化を受け入れて、
また諦め出す、とまらない。
時代は流れていく、抜かして、
それが善き生きる私たちの役目。

22

SORAIRO 国上 「目的地」に設定しました

地域の旗手であり、親人の存在。
ここ SORAIRO 国上で、新しい種を撒きたい。見てほしい。

ここには、森の資源や料理など、様々なテーマがあります。
それから一つひとつに、森の自然の種が込められています。
その思いを届けたサービスをお客様に提供することが、
私たちの願いと想いです。

たとえば、国上山の朝露に入ってもらい、お客様に届けてほしい。
たとえば、何れかたずとも自然と触れ合いながら BBQ を楽しんでもらいたい。
たとえば、イベント企画から販路を多くの人に確保してほしい。

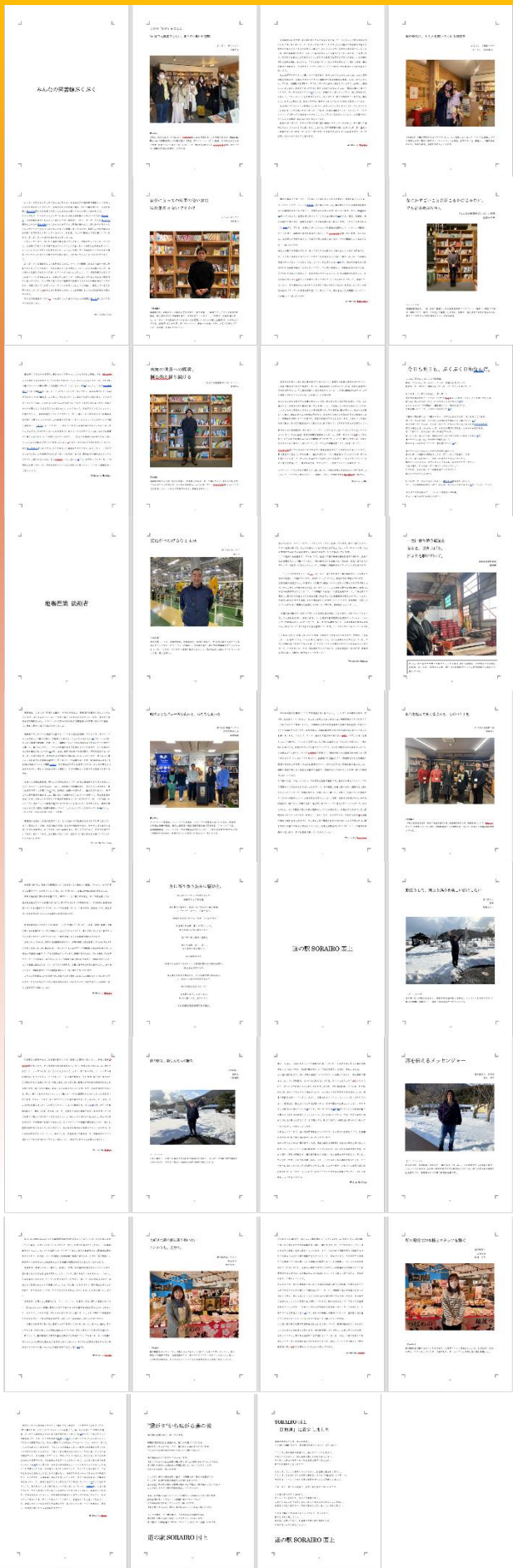
この一冊中、楽しめる内容で、自然と森を感じてほしいです。

この道の駅は今年で 20 周年。
リニューアルを機に、今までの役割に加え、
これからこのことを「目的」として飛躍していただける道の駅にしていきたいです。
道端だけでなく目的地へ、それ私たちの思いを届けてほしいです。

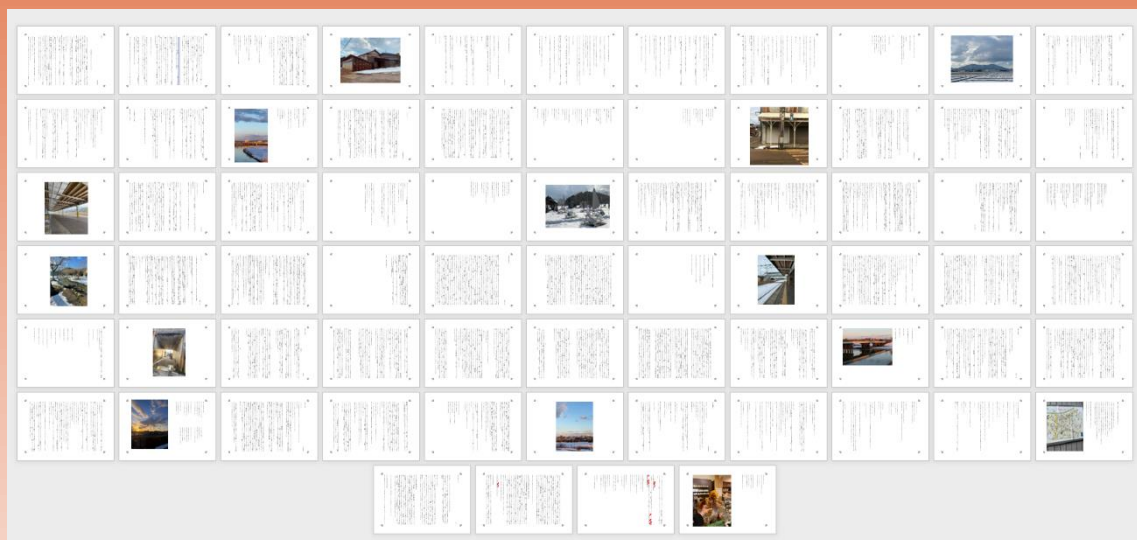
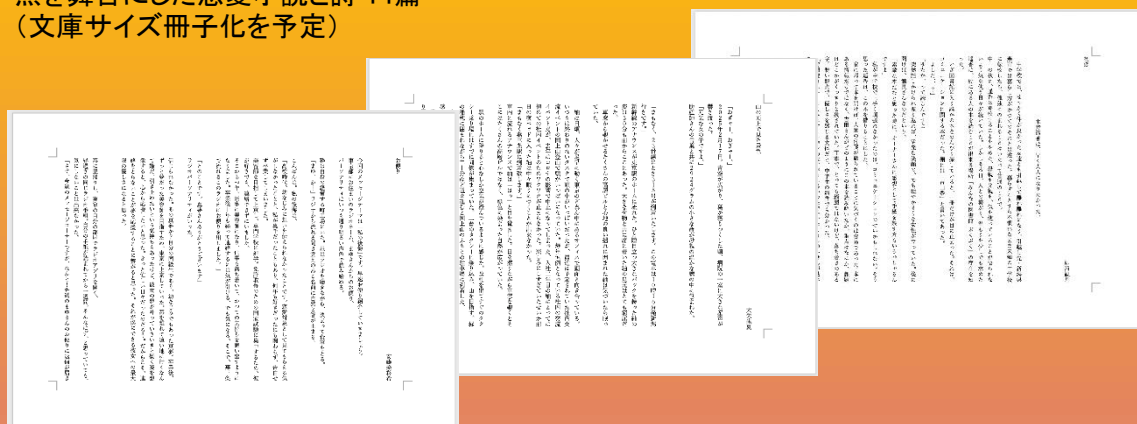
それは「道」を大事にしていった先に、きっと時。
私たちはそう考えています。
森の思いを届けた先に、お客様の笑顔と森の種がある。
それが何よりも嬉しいことです。

道の駅 SORAIRO 国上

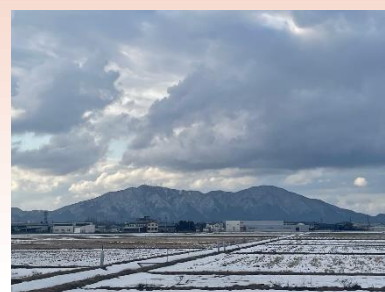
35



燕を舞台にした恋愛小説と詩 14篇 (文庫サイズ冊子化を予定)



街歩きをして、愛を温められる場所発掘 (短編小説冊子に挿入予定)



ここは強い。 土地も人も想いも、 すべてが。

雪の多い地域です。愛も多い地域です。どんなに雪が積もろうと人の想いが温め溶かす、大丈夫進んでいけるよ。とまらない。とどまらない。歩み続ける。たぎるそれぞれの想い。目的地を作る。目指したものを創る。集える場を造る。つながる、ひろがる、つばめの輪。通過点よりも目的地。利益よりも価値。場所よりも人。協奏する町でしよう。

暮らしの中にひとつつばめ。ズツとすすったら、口いっぱい広がった、温かく、優しいエネルギー。ところがぶくぶく温まりました。だれかに自慢したくて仕方ない。燕は一生いても足りないや。この場所も人も好きだから。出会いたい。出会わせたい。

「いいな」の追求を止めない。世界と戦える地元であれ。残していきたい文化と、すべき変化の共存。ヒト・ブンカ・ギジュツ、つないで結んで広げて。燕の歴史を厚くする。彩る。彩られる。もっともっと鮮明に。つくるで終わらない“魅せる燕”へ。この町はもっと住みたくなる。私たちはもっと進みたくなる。燕に生きる、燕を活かす。私たちはしなやかで頑丈。

新潟・燕



○担当教員コメント

多くのインプットとアウトプット、チームでまとめ上げるものと個人の力を発揮する課題を企画し、盛り込んだ。これまでコロナ禍での学び方に対応してきた2年生に、ようやく合宿型での活動を実現できた嬉しさから、企画を盛り込みすぎただろうかと、やり抜いてくれるか心配だった。しかし、チームをつくり、より良い言葉をめぐってしつこく対話を重ね、燕の人や産業、土地に感情移入して貢献を模索する14人だった。ライティングやミーティングで夜更かし気味になる反省はあったが、毎日、14人分の食事を自炊する生活力は想像以上だった。制作物は全員が発表にこぎつけ、発表会では燕の方々から良い評価をいただくことができた。しなやかで頑丈。ここは強い。新潟燕。ここは強い。武蔵野7コピ。(講師・コピーライター 梅田大輔)

○実習先コメント

私は、最終日の成果報告会で毎回泣いてしまいます。なぜ涙が出るのか、私にはわかりません。頑張った学生の皆さんの姿になのか、言葉が表す誰かの姿になのか、産み出された言葉の不器用さや素直さになのか、理由はわからないけど泣いてしまいます。そして、日常や周りの人を大事にすることを思い出させてくれます。私のような思いをしている燕の人がたくさんいます。これからも皆さんとのお付き合いを大事にしたいと思っています。(公益社団法人つばめいと 若林悦子)